本会顧問　春田三佐夫先生を悼む

本会顧問春田三佐夫先生には，病気入院中のところ，平成12年５月19日に逝去された。享年81歳であった。葬儀は同22日に関係者多数が参加の下でしめやかに行われ，故人の徳を偲び，ご冥福をお祈りした。

同先生は，本会の設立後間もない昭和48年に理事として就任，さらに昭和58年から平成３年までの９年間は副理事長として，また以後は顧問として，合計27年間にわたり，本会の発展のためにご指導とご助言をいただいた。先生のご逝去は誠に惜しまれる。

以下，先生のありし日を偲びつつ，そのご経歴，ご業績の概要ならびに筆者の回想等を交えて，会員各位にご紹介したい。

同先生のご専門は公衆衛生学，中でも食品衛生学，食品保存学であった。昭和16年に東京獣医畜産専門学校(現在の日本大学生物資源科学部獣医学科の前身)をご卒業後，同校助手，兵役等を経て昭和21年に東京都庁に採用となり，都立衛生研究所に勤務され，本会理事に就任された時には乳肉衛生部長であった(後に生活科学部長)。本会の目的とするところが，“動物用抗菌剤の基礎と臨床の調査研究を通じて動物の衛生および公衆衛生に寄与する”という二大柱にあることから，同先生の理事就任は正に当を得た人事であったと言うことができる。

実は筆者が同先生にお会いしたのは，本会の事務局長として，先生のもとへ理事就任のご依頼の打診に伺ったのが最初であった。温顔で，すらりと細身の同先生に対面し，ご挨拶後に２，３言葉を交わしたときの私の第一印象は，昔からの知己と会ったときのような近親感あふれる温かな雰囲気を持った方だということであった。

この印象は，先生が本会理事就任後，おつき会をさせていただいている間に一層深くなった。そして本会の運営に関して，先生の専門分野に限らず，幅広い見地から誠に当を得た数々の有益なご意見をいただき，会の運営上大変に寄与された。これは同先生の優れたご人徳と豊富な専門的な知識と経験に加えて，先生の見識と教養の奥深さによるものであろう。また先生は，さまざまな方面で活躍され，かなりの人脈を持っておられたようである。このようなことについて，以下若干言及することとしたい。

すなわち，同先生は専門分野における学問的活動としては，都の衛生研究所在任中に６つの大学の講師も兼任し，同所を昭和51年に退職後は，母校の日本大学農獣医学部(当時の名称)に招かれ，以後平成元年までの13年間を食品工学科食品保存学担当教授として大学院を兼担，教育と研究を続けるとともに同大学の種々の役職も兼任された。その一方，社会活動や学会活動の面では，厚生省の食品衛生調査会委員，通産省の審議会委員に就任，その他20以上の各種の関係学会や諸団体等の役員も勤められた。また，関係団体から９件の表彰，功労賞や感謝状が授与されている。

次に，同先生の著書(共著も含む)も多く，食品衛生関係の専門書や辞書など10数点に達する。私もそのうちで「生活と微生物学」(南山堂)を入手し，教育や研究の参考とさせていただき大変役立った。

もう一つ付記したいのは，同先生は正に文人といってもよいぐらいに筆の立つ洒脱な方であったという点である。私の知る範囲では，８，９年ほど以前に，モダンメディア誌(栄研化学(株))に連載記事として，①「断片医学散歩」，②「切手でたどる医学の小径」，その他を長期間執筆しておられた。①について私の記憶に残っている若干の

例をあげれば，江戸のオランダ人宿舎「長崎屋」跡の訪問記，幕府の医学館跡訪問記，鎌倉稲村ヶ崎の丘にあるコッホの来日記念碑訪問記，その他長崎のシーボルト塾跡訪問記などであるが，いずれも関係文献を渉猟，精読の上で現場を訪ねた記事であり，その時代・現場の様子がありありと目に浮かぶような，まことに洗練された文章であった。

以上のように，同先生は種々の面で社会的貢献をされており，その関係でさまざまな人脈，知人をお持ちであったようで，本会のシンポジウムの企画の際にも，いろいろなアドバイスを下さったり，医学関係，その他の領域の方を演者に紹介していただいたことも少なくない。

最後に，改めて同先生のご冥福を心からお祈りして，この回顧録を閉じることとしたい。

（前理事長　高橋　勇）